だれもが書ける
シナリオ作法を確立、
プロの技術を
身につけることを目標に。

あなたは毎日、何時間テレビを見ていますか。
あるいは月に何本、映画を見ますか。
それらのすべてに、シナリオの存在があるのはご存じですね。
実際、テレビや映画に使われるシナリオの数は膨大な量になります。
年間約10万本といわれていますが、正確な数はだれにもわからないほど。
それほどシナリオの需要は大きく、かつ、一般の方々の関心も高まっています。

最近では、話題のテレビドラマを紹介するのに、週刊誌にシナリオ形式で掲載されたり、映画のシナリオ台本が宣伝用に配布されたり、あるいはシナリオそのものが単行本としてベストセラーになったり……シナリオはずいぶん身近なものになりました。それだけに、ただ単にテレビや映画を見ているだけではなく、自分でシナリオを書いてみたい、という意欲のある方がふえてきたことも事実です。

かつて、シナリオは、特殊なものとして、教えたり教えられたりできるものではなく、ごく一部の才能のある人のみが書くものと思われてきました。それは、シナリオの書き方を体系づけ、方法論化したことがなかったからです。新鮮な発想と確かな技術、優れた企画力を身につけたシナリオライターの養成は、いつの時代にも要望されながら、実際に実を結ばなかったのも、こうしたことが大きな原因でした。しかも、シナリオの需要は年々ふえる一方です。現在、プロのシナリオライターの数は、需要の多さに比してきわめて少なく、業界からも常に新しい有能なシナリオライターの輩出が望まれています。

シナリオ・センターでは、今まで誰もなしえなかったシナリオ作法の体系づけと、実作中心のカリキュラムによって、誰でもシナリオが書けるようになる画期的なシナリオ教育プログラムを開発しました。そして、すでにその方式で数多くのプロライターを世に送り出しています。本講座は、その実績と自信をもって、映画・テレビのシナリオライターになろうとする人のための本格的講座として開かれます。さらにシナリオ・センターでは、講座をうけながら、常に実作することによって、創作する腕をつけ、実際に映画・テレビ界と密接な連絡をたもちながら、新人の業界進出に至るまで責任をもつことを使命としています。

スポーツだって、いきなりプロ選手になれるわけではない。
まず、基礎をミッチリやって、
確実な力をつけることから始めよう。

実際に原稿用紙に書いてみる……シナリオの興味が湧いてきます。

この講座は、映画やテレビのシナリオを、はじめて書いてみようという人々のために開講されるものです。したがって、この講座から映画理論や、シナリオ理論を学ぼうとする人たちには向きません。ここでは、これから数ケ月にわたって、この講座に出席し、実際にシナリオを書いて、添削を受け、そしてまた実作を重ねていく人だけに限ります。

絵でも、俳句でも、水泳でも、すべてそうですが、実際にやろうという人たちは、本をマスターするだけではダメなのです。水泳を習うのに、本を読んで畳の上で泳ぐ格好をしても、泳げるようにはなりませんね。

これまでシナリオを書こうとする人たちのために、沢山の入門書があり、優れた先生方の書かれた名著があります。そうした名著は、なるほどシナリオとはこういうものか、映画とはこういうものか、ということはよくわかりますが、それだけでは実際にシナリオが書けるようにはなりません。私たちの一般的な教育でもそうだと思います。たとえば、小学校に入ったばかりなのに、微積分をやってもわかりませんし、むずかしい量子論の話をきかせても、何の役にも立たないのと同じです。

この講座は、そういう意味で、シナリオをあなたと共に、それを実際に書いてみながら、添削し、また実作して、その知識が腕につたわり、自然に表現できるようにしたいのです。

まず基礎をマスターしましょう。書く技術を徹底的に指導します。

ここでルールみたいなものを作っておきたいのですが、これから行われるのは、そうした意味の基礎技術を習練することになりますから、あなたが「何を」書きたいかということは、まったく問題にしません。なぜなら、それはあなた個人のものであり、あなたの考えや思想がいかにユニークで高尚でも、そのあらわし方がヘタでは自分のそうした主張なり、考え方なりが、他人には胸深く伝わらないからです。「いかに書くべきか」という技術が尊重されなければならない理由もそこにあります。基礎的な訓練がなかったために、あたら若い才能を伸ばしきれずに消えていったライターを数多く知っています。それは、スポーツでも基礎訓練をおろそかにして、名選手になったためしがないのとよく似ています。

シナリオ・センターでは、それをひとりひとりの対話を大切にするセミナー（実習）方式で覚えてもらおうと思っています。

忍耐強くコツコツ書く…書き続けることに意義があります。

もう１つ、決心を促したいものがあります。それは「忍耐」です。ちょっと徳川家康のようですが、これだけはぜひキモに銘じていただきたいのです。今までシナリオライターを志した人は数多くいるでしょう。しかし、多くの場合途中で挫折してしまった原因はなんだったのでしょうか。才能がなかったからでしょうか。いえ、そうではありません。実は忍耐がなかったからなのです。はじめの１，２本はともかく、自分でだれにも頼まれずにコツコツ書くということは、予想以上にむずかしいことです。しかし、これは、アマチュアからプロになるために通らなければならない一つの関門といえましょう。それによって確実に、頭に入ったものを、腕につけたいのです。それ以外にうまくなる道はないのですから。

プロ・ライターとの結びつきは積極的にアタックしましょう。

講座は、初心者対象から組んでいます。まず原稿用紙の書き方から始まります。そして、毎週１回作品を書き、それを添削指導します。こうしたキメ細かい実技指導と方法論の研修を行いながら、実力養成を期すのです。講師陣は、シナリオ・センターの誇る各界の第一線で活躍する一流の方々ばかりです。多彩な講師陣から映画、テレビの実作に対する息吹を感じとってください。そして講師の方たちをつかまえては、大いに吸収すること。こうした積極性が実力養成へつながります。ただ漠然と講義に耳を傾けるだけではなく、講師から受けたものを自分のものにする努力を忘れてはなりません。

修了後はどうなるか？

この問題が、一番大きな関心事であろうと思われます。従来の学校では、修了式のあとは各自の実力によってプロの道を獲得するのだというのが常識になっています。しかし、シナリオ・センターでは、一般に、業界との結びつきまで考慮されていないのを不満に思い、いかに修了生を業界に結びつけるかを特色としています。幸いにも、今では東宝映画をはじめ各映画会社、各放送局、各プロダクション等の業界から、シナリオ・センターの新人作家集団に対して、積極的に実際の仕事が発注されています。それを具体化するために、“研修科”というクラスがあり、実際の注文をどう具体化し、放映作品（上映作品）にもっていくか、そして作家として定着するかを指導いたします。それによって、現在テレビ・映画界でシナリオ・センターで学んだ人たちから、数多くの新人ライターが活躍しています。

シナリオ作家養成講座 → 修了 → **ゼミ教室**（マンツーマン方式で作品添削指導） → **研修科**（業界からの仕事を受注。作品指導）